

# 古代肥後の氏族と鞠智城 — 阿蘇君氏とヤマト王権 —

須永 忍

## はじめに

本稿は、六・七世紀の肥後における有力氏族の検討を通して鞠智城（現熊本県菊池市・山鹿市）の築造要因・造営位置の問題や、同城と当該地域の有力氏族との関係を考えるものである。

鞠智城の築造要因やその位置については、坂本経堯氏が①有明海監視・②大宰府（現福岡県太宰府市）など北九州防衛に関係した兵站的役割・③南九州の熊襲対策という点を提示して以来（坂本一九七九a）、この分類をベースにして多くの研究者が論究してきた。最近では①の視角について、木村龍生氏は鞠智城から有明海が臨めないことや、同海の干満の差は激しく航行には土地勘が求められるため、諸外国の侵攻が困難であったことを指摘している。また、③についても対熊襲・隼人政策のために防衛施設を造営するのならば、鞠智城よりも遙かに南方の肥後国葦北郡域ないし球磨郡域に築造するのが自然であるとされる。そして、「鞠智城の築城の目的は、交通の要衝かつ穀倉地帯であった菊鹿盆地を抑え、物資を貯蓄し、必要に応じて大宰府あるいは肥後国府などへ、その物資を運搬することであった」と結論付け、①・③の視角に対し否定的立場を採っている（木村二〇一四）。鞠智城の役割・機能は時代と共にフレキシブルに変容し続けていったと想定できるが（矢野二〇一六）、北九州防衛の兵站的役割という、白村江敗戦（六六三）以後のヤマト

王権の対外政策に関連付けて理解する②の研究視角は重要視できると思われる。本研究も、鞠智城の築造要因・位置関係・その主たる役割については、②の視角を重視する。

このように、鞠智城は北九州防衛のために王権の意向によって七世紀後半に築造された古代山城である。大宰府が鞠智城の繕治に關与していること（『続日本紀』以降『続紀』と略称）文武二年（六九八）五月甲申条）などより、同城はいわゆる「官営」の性質を有していると理解するのが一般的であり、例えば肥後の有力氏族の思惑など、在地の事情によって造営されたものとは考えられないだろう。しかし、鞠智城築城に肥後の有力氏族が全く関与していなかったとも想定し難い。地域に影響力を有し、在地の事情に精通していた有力氏族の支援なしに、王権側が独自に造営したと評価するのは難しいと思われる。後述するように、鞠智城が造営された七世紀後半の肥後において、地域に大きな影響力を有していたのは国造である。白村江敗戦直後における王権は、唐・新羅による侵攻の危機に対して防衛施設の構築が急務となっていたが、造営を早めるためにも国造などの有力氏族に協力を要請し、見返りとして国造や評造の地位を保障していったことが想起される。肥後の有力氏族としても、地域への影響力を維持するために国造・評造のような地位は不可欠であり、王権の要請に積極的に応える必要があったと想定できる。

したがって、鞠智城築造の問題を考える際、坂本氏が提唱した①③の視角だけではなく、肥後の国造など有力氏族との関係に着目することも重要といえるが、こうした視点からアプローチした研究として、長洋一氏・木崎康弘氏・宮川麻紀氏の論考が挙げられる。

長氏は、鞠智城築造を肥前・肥後に大きな影響力を持ったとされる肥国造の肥君氏<sup>(一)</sup>や、筑紫肥君氏・葦北国造の葦北君氏に対する王権の牽制策と捉え(長一九九一)、木崎氏は肥君氏に加えて筑紫国造の筑紫君氏への警戒という王権の「内憂」も同城の成立に作用したと評価している(木崎二〇一四)。また、宮川氏は鞠智城が菊鹿盆地に造営された前提として、王権に協力的な筑紫肥君氏が基盤としていたことが関係すると指摘する(宮川二〇一三)。肥後の有力氏族の動向から鞠智城形成の問題を考察するこれらの見解は、①③の視角を重視する意見と比較すると少数派であるものの、重要な指摘といえるだろう。

しかしながら、先行学説では阿蘇国造たる阿蘇君氏と鞠智城の関係について重要視されていないように思われる。後に述べるように阿蘇君氏は、鞠智城が構築された肥後国菊池郡域の東に隣接する肥後国阿蘇郡域を拠点としており、「鞠智城に最も近い位置を本拠とした肥後の国造」となる。鞠智城が築造された七世紀後半における、同城と阿蘇君氏の関わりが問題となってくるであろう。したがって、本稿では肥後の有力氏族の中でも、特に阿蘇君氏の動向に注目する。鞠智城研究は、同城の西方の有明海方面・北方の筑紫方面・南方の大隅・薩摩方面に着目されてきたが、東方の阿蘇方面に焦点を当てることで新たな検討視角の提示を目指したい。

## 一・七世紀前半以前の阿蘇君氏

### (一) 阿蘇君氏の基本的性格

阿蘇君氏と鞠智城の関係を考察する基礎作業として、同氏の基本的な性質を検討し、続いて同城築造前代にあたる七世紀前半までの動向を探り、その重要性を指摘していく。

肥後の有力氏族には、支配していた地名(須原二〇一一)、ないし仕奉の基盤となる地名(中村二〇一五)を氏名(ウヂナ)として冠する地名氏氏族や、部民を管理した伴造に由来する氏名を有する伴造氏氏族が存在する(第1表参照)。そして、現状では姓(カバネ)を持つ場合、「君」で統一されているのが特徴である。地方有力氏族の負う「君」の姓は、王権に対する独立性を示すものと理解するのが一般的である。近年では中村友一氏が「君」について、地域の管掌を主として采女の貢進の他、自らが仕奉する際は舍人や臨時の使役のような「時限的仕奉」を行っていた氏族が冠していたと提唱している(中村二〇一五)。地方有力氏族は「直」姓を有するケースが多いが、中村氏が「君」姓と異なり「直」を持つ氏族が中央有力氏族に列していないことから「直」の後進的性質を指摘していることを参照すると、少なくとも「君」で統一される肥後の有力氏族の優位性を読み取るとは許されよう。阿蘇君氏もこうした肥後の有力氏族の一氏であり、姓から王権と密接な関係を有していたことが想起されるところである。

次に、王権と深い関わりを持っていたと推察できる阿蘇君氏についての先行研究をみてみよう。阿蘇君氏について論じた先学は、その基本的性格を次のように整理している(井上一九七〇、田中卓一九八六、板楠二〇〇三、隈二〇〇四など)。

I. 阿蘇郡域を基盤とした有力氏族であり、勢力圏はほぼその中に収まる

第1表 肥後における有力氏族

国	郡	氏名	姓名	位階	官職	出典史料	備考
肥後	玉名	日置部	君	—	外少初位下	権擬少領	「日置部君墓誌」
	山鹿	—	—	—	—	—	—
	菊池	—	—	—	—	—	—
	阿蘇	阿蘇	君	—	—	『紀』宣化元年5月辛丑条	阿蘇国造氏
	合志	日下部	—	辰吉	—	擬大領	『三実』貞観18年9月己卯条 白亀を献上
	山本	—	—	—	—	—	—
	飽田	建部	君	貞雄	借外従五位下	大領	『三実』貞観3年8月壬戌条
		建部	君	馬都カ	大初位下	主政	「平城宮出土木簡（天平3年）」 （『平城宮木簡』1）
		建部	君	弟益	正七位上	平高棟家令	『続後紀』承和14年3月丙申条 「長統朝臣」改賜氏姓
	託麻	—	—	—	—	—	—
	益城	肥	君	馬長	—	—	「浄水寺延暦20年碑」 肥国造氏
		大伴	君	熊凝	—	—	『万葉集』巻5 886-891
	宇土	額田部	君	得万呂	—	—	「仕丁送文（天平勝宝2年）」 （『大日本古文書』25）
	八代	肥	君	—	—	—	『肥前国風土記』etc
	天草	—	—	—	—	—	祖先伝承より推定。肥国造氏 「国造本紀」に天草国造
	葦北	葦北	君	—	—	—	『紀』敏達12年は歳条 葦北国造氏
		刑部穀部	—	阿利斯登	—	葦北国造	『紀』敏達12年は歳条 日羅の父
		他田	—	熊道	外従七位下	少領	『続後紀』天長10年3月丙申条 社会的救済により褒賞
	球磨	—	—	—	—	—	—

※姓を有する有力氏族。姓を持たない氏族も地域において有力な位置付けを持つ場合、表に含めた

※『日本書紀』は『紀』、『続日本後紀』は『続後紀』、『日本三代実録』は『三実』と略記

※表の作成にあたり、坂本経堯「墓誌銅板を副葬した玉名郡人日置氏墳墓考」、佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考證篇2、宮川麻紀「鞠智城築城の背景」も参照した

II. 阿蘇国造に任命された有力氏族である  
III. 神武大王の王子である神八井耳命を祖とし、肥君氏などと同族関係を持つ

Iであるが、阿蘇君氏は「阿蘇」なる地名を氏名とする地名氏姓氏族である。氏姓の成立は六世紀前半頃と評価されていることから（吉田一九八八、中村二〇〇九）、阿蘇君氏は六世紀以降の阿蘇郡域における中心的氏族であり、少なくとも当該地域に大きな影響力を有していたことは確かであろう。そして、阿蘇郡域の中でも阿蘇五岳と阿蘇外輪山に挟まれたカルデラ地帯、その北半部にあたる阿蘇谷を拠点とした有力氏族とされている。当地域には阿蘇君氏が奉斎したと考えられており、十世紀に延喜式内社ともなった阿蘇神社（現熊本県阿蘇市・同氏の祖たる建磐竜命などを祀る）・国造神社（現阿蘇市・祭神は同氏の祖となる速瓶玉命など）が存在する。また、五世紀初頭頃の熊本県下でも最大級の前方後円墳となる長目塚古墳（現阿蘇市）や、六世紀後半頃の巨石横穴式石室を内蔵する上御倉古墳・下御倉古墳（共に現阿蘇市）などの有力古墳も見受けられ、阿蘇君氏ないしその前身となる有力者の墳墓と位置付けられている。現状では阿蘇君氏の阿蘇郡域におけるイニシアティブを否定する要素は特に認められないといつて良い（二）。

続いてIIに移ろう。国造は王権から地方の行政権や裁判権などを付与され、支配地域の伴造にも影響を与えた地方官的存在である（石母田一九七一など）。「国造本紀」によると、肥後には肥国造・阿蘇国造・葦北国造・天草国造の四つの国造が存在していたと考えられている。

【史料1】『先代旧事本紀』『国造本紀』肥国造条

瑞籬朝、大分国造同祖、志貴多奈彦命兄遲男江命定「賜国造」。

【史料2】『先代旧事本紀』『国造本紀』阿蘇国造条

瑞籬朝御世、肥国造同祖、神八井耳命孫速瓶玉命定「賜国造」。

【史料3】『先代旧事本紀』『国造本紀』葦北国造条

纏向日代朝御代、吉備津彦命兄三井根子命定「賜国造」。

【史料4】『先代旧事本紀』『国造本紀』天草国造条

志賀高穴穗朝御世、神魂命十三世孫建嶋松命定「賜国造」。

肥国造は、肥後国八代郡域を本拠として肥前・肥後などに大きな影響力を誇っていたと理解するのが一般的である。そして、阿蘇国造は阿蘇郡域、葦北国造は葦北郡域、天草国造は肥後国天草郡域を基盤としていたとされる。国造は支配していた国名を氏名として名乗るのがスタンダードと考えられることから（篠川二〇〇五）、阿蘇国を支配した阿蘇国造に任命されたのは阿蘇君氏と評価して大過ないであろう<sup>(三)</sup>。国造は筑紫君磐井の乱以後に設置され、基本的に天武天皇治世末年頃に廃されたと評価されているため（篠川一九九六）、六世紀前半から七世紀末にかけて阿蘇君氏が阿蘇国造に任命されたと考えられる。

またⅢにも関わってくることであるが、「国造本紀」によると肥国造と阿蘇国造は同族関係にあり、肥君氏と阿蘇君氏の密接な関係が読み取れる。その一方で葦北国造・天草国造とはそうした関係に

なかったことが注目され、六・七世紀における肥後の情勢の一端を窺うことが可能である。肥君氏と阿蘇君氏の同族関係は『古事記』でもみえる。

【史料5】『古事記』神武段

（前略）故、其日子八井耳命者（茨田連・手島連之祖。）神八井耳命者（意富臣・小子部連・坂合部連・肥君・大分君・阿蘇君・筑紫三宅連・雀部臣・雀部造・小長谷造・都祁直・伊予国造・信濃国造・道奥石城国造・常道那賀国造・長狭国造・伊勢船木直・尾張丹波臣・島田臣等之祖也。）

【史料5】によると、阿蘇君氏は神武大王の王子たる神八井耳命を祖とすることが記され、肥君氏の他にも、中央有力氏族となる意富（多）臣（後に朝臣）氏、また九州では豊後国大分郡域を基盤とした大分国造の大分君氏や、筑前国那珂郡域を本拠とした筑紫三宅連氏とも同族関係を結んでいたことが窺える。こうした密接な関係が形成された要因や時期が問題となつてこよう。

本節では、先行学説を参照しながら阿蘇君氏の基本的性格を概観したが、ここで留意すべきは、明らかに阿蘇国造の阿蘇君氏のことを記している史料は【史料2・5】のみということである。これらの史料からはⅠ・Ⅲの基本的性格程度のことしか指摘できず、七世紀以前における阿蘇君氏の具体的な動向を復原するのは困難ということになる。

しかし、史料が僅少な阿蘇君氏にアプローチし得る史料は他にも存在する。それが六世紀以降の王権の九州における一大拠点たる那



津官家（現福岡県福岡市に比定）の修造に関するものである。節を改めて考察してみたい。

## （二）那津官家と阿蘇君氏

那津官家は、古代における九州の中核となった大宰府との関連性が注目されている王権の重要拠点である。『日本書紀』（以降『紀』と略称）では那津官家に関して宣化大王が次のような詔を下している。

### 【史料6】『紀』宣化元年（五三六）五月辛丑条

詔曰、食者天下之本也。黄金万貫、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>療<sub>レ</sub>飢。白玉千箱、何能救<sub>レ</sub>冷。夫筑紫国者遐邇之所<sub>二</sub>朝届<sub>一</sub>、去来之所<sub>二</sub>関門<sub>一</sub>。是以海表之国候<sub>二</sub>海水<sub>一</sub>以来賓、望<sub>二</sub>天雲<sub>一</sub>而奉貢。自<sub>二</sub>胎中之帝<sub>一</sub>泊<sub>二</sub>于朕身<sub>一</sub>、収<sub>二</sub>藏穀稼<sub>一</sub>、蓄<sub>二</sub>積儲糧<sub>一</sub>。遥設<sub>二</sub>凶年<sub>一</sub>、厚饗<sub>二</sub>良客<sub>一</sub>。安<sub>レ</sub>国<sub>二</sub>之方<sub>一</sub>、更無<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>此。

故朕、遣<sub>二</sub>阿蘇仍君<sub>一</sub>、へ未<sub>レ</sub>詳也。へ加<sub>二</sub>運<sub>一</sub>河内国茨田郡屯倉之穀<sub>上</sub>。蘇我大臣稻目宿禰、宜<sub>下</sub>遣<sub>二</sub>尾張連<sub>一</sub>、運<sub>中</sub>尾張国屯倉之穀<sub>上</sub>。物部大連鹿鹿火宜<sub>下</sub>遣<sub>二</sub>新家連<sub>一</sub>、運<sub>中</sub>新家屯倉之穀<sub>上</sub>。阿倍臣宜<sub>下</sub>遣<sub>二</sub>伊賀臣<sub>一</sub>、運<sub>中</sub>伊賀国屯倉之穀<sub>上</sub>。修<sub>二</sub>造官家那津之口<sub>一</sub>。又其筑紫・肥・豊三国屯倉、散在<sub>二</sub>懸隔<sub>一</sub>。運輸遙阻。儻如須要、難<sub>二</sub>以備<sub>レ</sub>卒。亦宜<sub>下</sub>課<sub>二</sub>諸郡<sub>一</sub>分移、聚<sub>二</sub>建那津之口<sub>一</sub>、以備<sub>二</sub>非常<sub>一</sub>、永為<sub>中</sub>民命<sub>上</sub>。早<sub>下</sub>郡県<sub>上</sub>、令<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>朕心<sub>一</sub>。

【史料6】では、最初に外交の拠点である筑紫に穀物を蓄積することの重要性を述べ、大王が「阿蘇仍君」を筑紫に遣わしたことが、

さらに河内の茨田屯倉（現大阪府門真市に比定）の穀も運ばせることが記される。続けて、蘇我臣稻目・物部連鹿鹿火・阿倍臣某（大麻呂カ）といった群臣に対し、尾張連某・新家連某・伊賀臣某を遣わして、尾張の屯倉・新家屯倉（現三重県津市に比定）・伊賀の屯倉の穀を運ばせるように命じている。そして、非常に備え筑紫・肥・豊の屯倉からも穀・建物の一部を分け移して、那津の口に聚め建てるという命を下している（鎌田二〇〇一a）。

本記事について酒井芳司氏は、『漢書』などを下敷きにした作文なども認められることから、尾張の屯倉などから穀を運ばせるという部分まではその史実性が疑問視されるものの、筑紫・肥・豊の屯倉<sup>〔四〕</sup>から穀や倉を分け移して那津の口に聚め建てるという方式は類例のない特異な様相を示しており、時期は問題であるが何らかの史実が反映されていると指摘している（酒井二〇〇八）。酒井氏は那津官家の成立時期は六世紀中葉とする。そして、筑紫・肥・豊の屯倉から那津官家への穀運送は一時的なものではなく恒常的に行われ、これらの屯倉を当官家の支配下に組み込んだと考えられている（松原一九八三）。また、本事業は六世紀以降の大規模化する対外政策のために他所の屯倉から多くの穀を収納させて那津官家の兵站化を意図した施策との見解も呈されている（仁藤二〇一一）。これらに関連して、那津官家比定地となる現福岡市域には「三宅」なる地名が現在も残り、比恵・那珂遺跡群（共に現福岡市）からは六世紀後半頃の倉庫群などが発見されていることが参考となる。六世紀中葉以降、那珂郡域に王権の九州における一大拠点が造営されていたのは確かであろう。比恵・那珂遺跡群の建物群は、七世紀後半の大宰府・大野城（現太宰府市・福岡県大野城市・福岡県宇美町）

の形成により衰退するまで存続したとされる（米倉一九九三）。

さて、【史料6】では大王が直接遣わした人物として「阿蘇仍君」がみえる。この「阿蘇仍君」は漠然と阿蘇君氏として捉えられることが多いが、一方で「未詳也。」という注が付されている以上、阿蘇君氏のことと考えてはならないという意見もある（田中卓一九八六）。先行研究では、本事業に阿蘇君氏が関与したとする見解と、関わったとは評価できないとみる意見があり、直ちに同氏の事績と捉えるわけにはいかない。「阿蘇仍君」を阿蘇君氏と評する場合、「未詳也。」なる注が付与されている意味を検討する必要がある。

「未詳也。」の理解であるが、「仍」は衍字であり、傍らに施した訓が紛れて本文となったと指摘されていることが参照できる（飯田一九三〇）。本記事の原史料に「阿蘇君」（あそのきみ）と記す際、「の」に「仍」字を充ててしまい、「阿蘇仍君」（あそのきみ）と誤記することになり、『紀』編纂者が阿蘇君氏のことと認識できなかったと評価できよう。このように「阿蘇仍君」「阿蘇君」と評価できれば、那津官家修造事業に阿蘇君氏が関与したことを指摘可能になる。そして、阿蘇君氏は尾張連氏らと異なり、大王が直接遣わしたとして筆頭に掲げられていることから当該事業における特異性が窺え、現地における中心的人物であったことが読み取れる。

阿蘇君氏を派遣したという箇所は、前述のように先学において史実性が疑問視されている。しかしながら、阿蘇君氏に対して「未詳也。」の注が付いている以上、その部分については原史料が大幅に潤色された可能性は低いとみられる。尾張などからの穀運搬や、阿蘇君氏が茨田屯倉の穀を運んだことは史実性が薄いと捉えた

としても、同氏が那津官家修造の現地における中核的存在であった程度のことは認めても良いのではないだろうか。本記事は、阿蘇君氏が那津の口に派遣され、同氏を中心とした那津官家修造が行われたという内容の原史料に、重要な政策ということを示すため茨田屯倉からの穀運送や、群臣を動員した穀の運搬の事柄が追加されたものと思われる。六世紀中葉以降、阿蘇君氏は筑紫・肥・豊の屯倉の穀・倉を那津の口に聚め建てるという、九州における王権の一大政策に大きく関与していたと考えたい。阿蘇君氏が、こうした政策の中核に存在するということは、筑紫・肥・豊におけるイニシアティブを掌握したとまで評価できなくとも、これらの諸地域に一定の影響力を及ぼし得たであろう。そして、前述したように穀の集積が一時的なものではなく、恒常的に行われていたと評価されていることから、阿蘇君氏は七世紀後半に至るまで那津官家の機能維持に尽力し、王権から重要視されていたと考えられよう。阿蘇君氏がこのような大役に抜擢されたのは、同氏が那津官家の修造、その後の経営・維持に直接的に関与できる九州の有力氏族であり、さらに王権から信頼性の高い存在と認識されていたことと無関係ではない。

しかし、ここで問題となるのは、なにゆえ九州屈指の有力氏族である筑紫君氏や肥君氏がこうした施策の主導的立場に任命されなかったかであろう。那津官家が修造されたのは磐井の乱から間もない時期であり、信頼性が低下していた筑紫君氏を中核に据えなかったことは理解できるとしても、乱にて中立的立場を採った、ないし王権側に就き、乱後に筑前などにも勢力を拡大させたと目されている肥君氏（井上一九七〇、瓜生二〇〇九）が任じられていないのは注目できる。王権は那津官家修造に関与させる氏族として、肥君氏

よりも阿蘇君氏の方が王権にとって都合が良いと判断していたことを示唆しているといえる。次節では阿蘇君氏が那津官家修造事業に関わることによって、如何なる動向をみせるようになったかを検討する。

### (三) 阿蘇君氏の勢力伸長

阿蘇君氏は阿蘇郡域を本拠とした氏族であるが、畿内・讃岐・美濃にも関係氏族が見受けられる。九世紀初頭の畿内に居住する氏族の祖を書き記した『新撰姓氏録』(以降『姓氏録』と略称)によると、阿蘇(姓不明)氏がみえる(『姓氏録』不載姓氏録姓)。また、美濃国栗栖田郡には阿蘇君族刀自売(大宝二年〔七〇二〕美濃国戸籍)〔『大日本古文書』一〕、讃岐国大内郡に阿蘇(君あるいは姓なし)広遠・その父の阿蘇(姓なし)カ・豊茂(『政事要略』卷九十五所引「承平五年〔九三五〕六月十三日太政官符」、阿蘇(姓不明)常子など〔寛弘元年〔一〇〇四〕讃岐国戸籍〕〔『平安遺文』一〕が確認される(佐伯一九八三)。

正史において那津官家修造記事以外に具体的な動向をみせない阿蘇君氏、その関連氏族がなぜこのように畿内方面にも認められるかが問題となってくるが、同事業に絡めて捉えることも可能であろう。すなわち、那津官家修造によって阿蘇君氏は王権とより密接な関係を形成させ、中核的存在として政策に従事することになるが、畿内との連絡系統を確保するため、畿内および周辺地域に関係氏族を配置していった可能性が指摘できる。また、阿蘇君氏が畿内へ向かう最短ルートは阿蘇―豊後―瀬戸内海―畿内であるが、菊鹿盆地―阿蘇―豊後を結ぶ陸路は古墳時代には存在していたという(鶴嶋

一九九七)。阿蘇郡域から豊後方面へ向かうと、別府湾を臨む豊後国海部郡域や大分郡域に辿り着く。当地域の有力氏族は水上交通に長けたとされる海部君氏や<sup>(五)</sup>、前述の大分国造の大分君氏であり、阿蘇君氏は中央への進出の際にこうした氏族と協調していったと評価できよう。阿蘇君氏と大分君氏の同族関係も、この時に発生したとみて良いのではないだろうか。なお、大分郡域の北に隣接する豊後国速見郡域には肥後系の石屋形を備える鬼の岩屋一号墳(現大分県別府市)があり、阿蘇君氏との関係が注目される。

かかる阿蘇君氏関係氏族の在り方や、大分君氏との同族関係を考慮すると、【史料6】にあるように阿蘇君氏が茨田屯倉の穀運送にも関与していた可能性も想定できる。阿蘇君氏は、茨田屯倉から穀を運搬する際、瀬戸内海水上交通の便宜のために関係氏族を配置していき、海部君氏・大分君氏などとも連携したとの評価も可能である。このように評価しないとしても、阿蘇君氏は那津官家修造事業への関与を契機として、阿蘇郡域から畿内・瀬戸内海方面へ進出していったと捉えられる。

しかしながら、阿蘇君氏の対外進出を考える上で重要なのが筑紫・肥への進出の問題であろう。阿蘇君氏が九州において那津官家の修造や、その後の運営・維持に密接に関わる以上、本拠地たる阿蘇郡域とのつながりを如何にして確保したのかが注目される。また、次章にて考察するように、阿蘇君氏は多くの馬を飼育していたが、それらを穀の運送に利用する施策が行われた可能性もあり、阿蘇郡域―那津官家を結ぶルートの整備は不可欠であったと思われる。

先ず六世紀代の阿蘇郡域と那津官家を結ぶ陸上交通について検討してみよう。延喜式制以前の駅路に相当し、鞠智城などの古代山

城とも関連して成立したのが車路であるが、筑紫から阿蘇郡域まで筑紫―玉名―山鹿―菊池―合志―阿蘇というルートを辿る（鶴嶋二〇一一）。そして、玉名郡域・山鹿郡域・菊池郡域といった菊池川流域の装飾古墳や石人から、六世紀には筑紫と菊鹿盆地を結ぶ車路前身ルートが存在していたと指摘され（鶴嶋一九七九）、先述したように古墳時代には菊鹿盆地と阿蘇郡域を結ぶルートも形成されていた。このように阿蘇郡域から那津官家を結ぶルートの途中には、菊鹿盆地などが存在する。また、阿蘇君氏は肥の代表的屯倉である春日部屯倉（現熊本県熊本市に比定）を管理しており、それゆえに那津官家修造事業に拔擢されたと指摘する見解がある（田中史生二〇一四）。そのように評価できるとすれば、加えて肥後国飽田・託麻両郡域も関係してくることになる。いずれにしても、阿蘇君氏が那津官家の阿蘇郡域とのネットワークを構築し、同官家の修造・運営の円滑化を行うためには、玉名・山鹿・菊池・合志・飽田・託麻諸郡域という、肥後北部にある程度おさえておかななくてはならない。那津官家修造事業は、阿蘇君氏の目を畿内・瀬戸内海方面だけではなく、肥後北部にも向けさせる大きな契機となったと捉えられる。

なお、那津官家の現地管理者とされる筑紫三宅連氏と関連する古墳として、比恵・那珂遺跡群に接する福岡平野最大の墳丘規模を持つ東光寺剣塚古墳（現福岡市）が注目されている。当古墳は阿蘇溶結凝灰岩製の石屋形を内蔵することや、阿蘇君氏が那津官家修造に関与していることから、同氏の同族たる筑紫三宅連氏の墳墓として評価されている（桃崎二〇一四a）。筑紫三宅連氏は、阿蘇君氏のもとで、ないし協調して那津官家を管理していったのであろう。

菊池川流域は、江田船山古墳（現熊本県和水町）・岩原双子塚古墳・チブサン古墳（共に現山鹿市）・木柑子古墳・木柑子高塚古墳（共に現菊池市）などの古墳が示唆するように、多くの有力者が跋扈した地域であった。しかし、瓜生秀文氏によると、当該地域の有力者は磐井の乱において磐井に加担したために勢力を低減させたと指摘されている（瓜生二〇〇九）。さらに瓜生氏は、磐井と行動を異にした肥君氏は菊池川流域の有力者とは対照的に勢力を拡大させることとなり、春日部屯倉が設置された意義については、勢力が高まった肥君氏への牽制策と述べる。春日部屯倉設置によって強大な肥君氏への牽制が行われたとすれば、当屯倉の管理者としては那津官家修造に参与することで九州での地位を高め、肥後北部に一定程度の干渉が必要となっており、さらに王権から信頼性の高い有力氏族とみなされていた阿蘇君氏の存在が注目できよう。

そして、このような様相をみせる六世紀中葉以降、阿蘇君氏が阿蘇国造に任命されたと考えられる。王権の新たな地方官たる国造に任じられた阿蘇君氏は、支配域を再認識して阿蘇郡域への影響力を一層強めたであろう。また、六世紀後半以降は、菊池川流域の有力者の影響力が弱まり、東に隣接する阿蘇郡域の阿蘇君氏が那津官家修造事業に参与することで、肥君氏よりも王権と緊密に結び付き、肥後北部への干渉も不可欠となっていた時期である。有力者の地位が低下していた菊池川流域は、阿蘇君氏が進出しやすい状況があったといえるが、こうした情勢をみせる肥後北部において、新たに阿蘇国造となった阿蘇君氏は如何なる動向をみせたのであろうか。

本稿では、阿蘇国造の阿蘇君氏が王権と特殊な関係を有していることを背景に、肥後北部に影響力を拡大・扶植し、同国造の支配す

る阿蘇国に包括した可能性を提唱したい。阿蘇郡域の西方に隣接する菊池川流域の有力氏族の勢力低下や、那津官家修造事業への参与に乗じて、肥後北部に影響力を強めていったと想定される。先行学説とは異なり、阿蘇君氏の勢力圏は阿蘇郡域のみならず、肥後北部という広域に及んだと考える。特に、阿蘇郡域に隣接する山鹿・菊池・合志郡域への影響力は強かったと思われる。

阿蘇郡域は長目塚古墳などの大型古墳が象徴するように、早くから土地開発が展開した豊かな地域であるが、阿蘇山の火山災害の影響を受けた時に備えて当地域以外にも勢力を伸ばし、多くの土地を確保する必要があったと推察される。そして、阿蘇郡域以外への本格的な勢力拡大が可能となったのが磐井の乱後の時期であり、肥君氏よりも阿蘇君氏の方が勢力を伸長させやすい状況があった。菊鹿盆地は、六世紀後半以降に米の生産力が向上した地域でもあったが（木村二〇一一）、那津官家修造・運営に際してこうした地域を強固に確保する必要があったと考えられる。もしくは、この時期に当該地域の生産力が向上したのも、那津官家修造・運営に関係があり、阿蘇君氏ないし同氏に協調する有力氏族が開発を主導していたのではないだろうか。本拠地たる阿蘇郡域に隣接しており拠点としやすいため、阿蘇君氏が菊鹿盆地の生産性を高め、強固に維持していたと想定される。いずれにしても、菊鹿盆地は阿蘇君氏が特に確保すべき重要地域と評価できよう（六）。

また、当時期に上御倉古墳・下御倉古墳のような肥後でも有数の巨石石室を備える有力古墳が築造され、長目塚古墳以来のピークを形成しているのも、こうした阿蘇君氏の勢力伸長と無関係ではないであろう。上御倉古墳・下御倉古墳の巨石石室は、弁慶ヶ穴古墳（現

山鹿市）などの肥後北部の有力古墳と近似した設計プランを持っていると考察されているが、阿蘇郡域と肥後北部の関係を評価する上で参照できる（限一九九九、高木二〇一二）。

本章では、阿蘇国造阿蘇君氏的那津官家修造・運営への密接な関与を背景とした、肥後北部への勢力拡大について言及した。しかし、勢力が低下していたとしても、果たして肥後北部の有力氏族が阿蘇君氏の影響力扶植を一方的に受け入れたかという問題が次に浮上してくる。例えば、上御倉古墳・下御倉古墳の埋葬施設は、玉名郡域の塚坊主古墳（現和水町）を起源とした設計とされ、肥後北部の有力古墳と石室規模も近似しており、石材も山鹿郡域から運ばれてきたものと指摘される（高木二〇一二）。考古学の視点からみると、阿蘇君氏が肥後北部の有力氏族を一方的におさえつけたと捉えることは難しい。上御倉古墳は前室の閉塞石に装飾を施した装飾古墳であるが、肥後北部において盛行した装飾古墳の文化を阿蘇君氏が受け入れていることから、同氏の一方的な影響力扶植を想定するのは躊躇せざるを得ない。また、阿蘇君氏が肥後北部に進出したとするのなら、肥後の最有力氏族たる肥君氏との関係も述べなくてはならない。次章からは、阿蘇君氏と肥後の有力氏族の相互関係を検討し、これらの問題を考える。

## 二．阿蘇君氏と肥後の有力氏族

### （一）阿蘇君氏と馬

本節では、阿蘇君氏と馬の関係に触れ、同氏と肥後北部の有力氏族との関わりについて考える。『延喜式』によると、古代肥後には九州屈指の馬牧である二重牧などが存在した。

【史料7】『延喜式』兵部省式

諸国馬牛牧。(中略)肥前国。へ鹿嶋馬牧・庇羅馬牧・生属馬牧  
〔中略・三つの牛牧〕。へ肥後国。へ二重馬牧・波良馬牧。へ日向  
国へ野波野馬牧・堤野馬牧・都濃野馬牧〔中略・三つの牛牧〕。へ  
右諸牧馬五・六歳、牛四・五歳、毎年進左右馬寮。各備梳  
刷・剉。其西海道諸国、送大宰府。但帳進省。  
凡肥後国二重牧馬、若有超群者進上。余充大宰兵馬及当国・  
他国駅・伝馬。

【史料7】によると、西海道には官牧たる八つの馬牧を確認でき、  
五・六歳となった馬は大宰府に送るように規定されている。これら  
の馬牧の内、二重牧（現阿蘇市の二重峠周辺に比定）・波良牧（現  
熊本県小国町に比定）が肥後に位置しており、共に阿蘇郡域に含ま  
れている。特に、二重牧は阿蘇外輪山の二重峠を挟み、阿蘇郡域  
西端から合志郡域東端に跨る広大なエリアを擁すると指摘されてお  
り、【史料7】には当牧の進上馬の中で群を抜いた良馬があれば中  
央へ貢納し、他は大宰府の兵馬および西海道諸国の駅馬などに充て  
よとの特例措置がみえる（限二〇〇四など）。西海道諸国の馬牧で  
育成された馬は大宰府に送られていたのであるが、二重牧の馬はそ  
れに加えて西海道諸国にも送られていたのであり、当牧の高い生産  
性を読み取ることができる。なお、板桶和子氏は【史料7】の「若  
有超群者」以下の部分について、「養老令」厩牧令に「群」は百  
頭とする規定がみえることから、貢納馬が百頭を超えた場合に中央  
へ送る特別規定と捉えている（板桶二〇〇三）。

【史料8】「養老令」厩牧令牧每牧条

凡牧、每牧置長一人・帳一人。每群牧子二人。其牧馬牛、  
皆以百為群。

延喜式制下で最も多くの馬を進上していたのは東国の上野で  
あり、多くの牧から年間九十五頭の馬を貢納していた（前沢  
一九九一）。板桶氏の指摘が成立するとすれば、二重牧は一つの牧  
で上野を凌駕する頭数を献納する場合もあったことになる。どちら  
の解釈が妥当であるか判断が難しいが、いずれにしても二重牧が九  
州の馬牧の中で大規模であったという特異性を帯びていたことは確  
かであろう。推古大王が蘇我臣馬子を讃美する際、馬子を「譬武伽  
能古摩（日向の駒）」に例えたことが象徴するように（『紀』推古  
二十年「六一二」正月丁亥条）、古代九州の良馬としては日向の馬  
が著名であったが、二重牧の馬は質よりも量の方に重点が置かれて  
いたといえよう。『延喜式』は十世紀の史料であり、こうした阿蘇  
郡域の馬牧の特殊性がいつ頃まで遡及するのかが問題となるが、王  
権の対外政策と密接な関係を有していた阿蘇君氏との関連が注目で  
きるところである。

二重牧が含まれる合志郡域では、八反原遺跡（現熊本県合志市）  
などから五世紀代の馬骨・馬具が発見されており、この時期にはす  
でに渡来系集団による馬飼育が始まっていたことを示している<sup>70</sup>。  
当該期に二重牧が形成される要素が揃ったといえるだろう。五世紀  
後半以降、阿蘇山周辺など九州の馬牧にて飼育された馬は、筑紫に  
集められて対外政策に用いられたという（桃崎二〇一四b）。馬は  
軍事的に重要な存在であったが、次第に大規模化していく王権の派

兵に対して、多くの馬の飼育が必要となったのではないだろうか。また、筑紫・肥・豊の屯倉から穀などを那津官家へ運搬する施策の効率化のためにも、大規模な馬飼育は不可欠であったと思われる。

このように考えると、二重牧の経営主体として、那津官家修造事業の中核的地位に拔擢され、加えて阿蘇国造として阿蘇郡域を中心に強い影響力を持ち、さらに周縁地域にも進出を志向していた阿蘇君氏を想起せざるを得ない。二重牧は合志郡域東端にも跨るが、当郡の有力古墳が集中して造営されたのは西部であり、王権との密接な関わりを背景として勢力を拡大させた阿蘇君氏と結び付けるのが良いと思われる。六世紀以降、阿蘇君氏が軍事・運送目的で経営を本格化させた馬牧の一つが二重牧ではないだろうか。

しかし、本論では阿蘇君氏が馬牧の経営を展開させた要因として、別の視角も提示したい。肥後北部の六世紀後半以降の有力氏族の墳墓となる永安寺東古墳（現玉名市）・弁慶ヶ穴古墳・鍋田横穴墓群（現山鹿市）などでは、馬の装飾壁画が存在し、また多くの有力古墳からは馬具が発見されている。肥後北部の有力氏族が、馬を重要視していたことを示唆するものといえよう。阿蘇君氏は、肥後北部への進出を志向していたと指摘したが、こうした様相をみせる肥後北部の有力氏族に対し、阿蘇国に組み込んで影響力を扶植する対価として馬を供給していたのではないだろうか。

阿蘇君氏が那津官家修造・運営を展開させるためには、筑紫までのルートや収納する作物確保の面から、生産力の高い地域となる菊鹿盆地などの有力氏族の協力を得るのが有効であった。阿蘇君氏は、那津官家の運営体制の構築・安定化のために、肥後北部の有力氏族をおさえつけるのではなく、馬を提供するなどの妥協を行った

と思われる。特異な地位を獲得したとはいえ、勢力拡大を果たしたばかりの阿蘇君氏が肥後北部へ徹底した勢力扶植を実施すれば反発が起ることが予想され、それを避けるためにも徐々に懐柔して取り込んでいくことが必要だったと推察される。肥後北部の有力氏族としても、こうした阿蘇君氏の影響下に組み込まれることは不都合な事態ではなく、馬を獲得でき、さらに同氏を介して那津官家の修造や運営にも関与することが可能となり、王権内における地位の向上も果たし得たであろう。このような想定が成り立つとすれば、肥後北部の有力氏族は阿蘇君氏と比較的フラットな関係を保持しつつ、同氏の進出・影響力扶植を受け入れた状況が復原できる。また、磐井の乱後に勢力を拡大させつつあった肥君氏の進出を抑制するためにも、阿蘇君氏との同盟に近い協調関係は必要だったと考えられる。

阿蘇郡域で飼育された馬は、对外政策における軍馬および那津官家へ穀を運搬する荷馬といった役割の他、肥後北部の支配を安定させる役割を阿蘇君氏によって担わされていたと考えられる。

## （二）阿蘇君氏と肥君氏・肥直氏

肥君氏は、八代郡域を本拠として、肥後のみならず筑前・肥前・薩摩にも強い影響力を及ぼした有力氏族である<sup>8)</sup>。周知のように、肥国造でもあった肥君氏は水上交通に長け、継体大王墓とされる今城塚古墳（現大阪府高槻市）の石棺の材料として阿蘇ピンク石（馬門石）を供給している。これらのことから、肥君氏は磐井の乱にて磐井に加担せずに、王権側に就いて肥後周辺地域に勢力を拡大し、对外政策にも深く関与していったとされる（井上一九七〇、瓜生

二〇〇九。このように肥君氏は筑紫君氏に比肩する九州屈指の有力氏族と捉えられているが、同氏を考える上で留意すべきは、同じ氏名を冠し、従来ほとんどピックアップされることのなかった肥直氏の存在である。肥君氏と肥直氏は同様の氏名を負っているが、両者は相違する姓を有しているため、王権との関わり方が異なる別個の集団と捉えられる。

肥直氏は、肥君氏と同じく肥国を支配ないし基盤としたことに起因する氏名を名乗り、「君」姓より後進的な「直」姓を持つ新興氏族となる。肥直氏としては、「平城宮出土木簡」に肥直三田次（『平城宮発掘調査出土木簡概報』二七）<sup>（九）</sup>、「久安五年（一一四九）多神宮注進状草案」に多神社（現奈良県田原本町・祭神は神八井耳命など）祝部の肥直尚弼が確認される（『神祇全書』三）<sup>（佐伯一九八二）</sup>。特に、後者は中央有力氏族の多朝臣氏と共に、同氏の本地にあたる大和国十市郡域の多神社の経営に深く関与している。『姓氏録』大和皇別では多朝臣氏と同祖とする肥直氏がみえ、すでに九世紀初頭には大和国に移貫しており、両者の密接な関係が生起していたと考えられる。このように、肥直氏は肥前・肥後どちらかをルーツとすると思われるが、現状では中央のみに存在が認められる氏族である。そして、神八井耳命系譜の中心的存在となる多朝臣氏が管理する多神社の祭祀に与っていたことは重要視できる。中央における活動の痕跡が希薄な肥君氏よりも、中央との関わりが深い氏族と評価することが可能である。

以上のように肥直氏を検討すると、確かに姓の面では肥君氏と比較して劣位にあたる氏族であるものの、次第に肥君氏に比肩するようになり、八世紀までに中央と緊密な関係を持つほど勢力を伸ばし

ていったプロセスが想定される。

肥国造は肥君氏と考察するのが一般的であり、九州の国造の多くは筑紫国造の筑紫君氏や大分国造の大分君氏など「君」姓を有する氏族が任命されたと考えられている。しかし、その一方で豊国造の豊（国）直氏のように「直」姓の国造もみられる（篠川二〇〇五など）。すなわち、必ずしも肥君氏のみが肥国造であったと評価する必要はなく、肥直氏も肥国造であった可能性も成り立つ余地がある。先掲した【史料1】の「国造本紀」肥国造条は肥国造の系譜となるが、肥君氏のものとは断定できないと思われる。

こうした推定が許されるとすれば、肥君氏は磐井の乱において磐井を支援したために王権からの信頼性が低下し、代わって磐井側に立たなかった有力者が肥国造に任命され「肥直」の氏姓を賜与されるなど、肥国のイニシアティブを一時的に掌握したという想定も可能となる。その場合、肥君氏はそうした肥直氏に対抗して他地域に進出し、対外政策を支援するなど王権へ積極的に働きかけたのである。その後の肥国造の地位は、二氏の間で流動的に移動したと思われる。少なくとも、氏姓が成立した六世紀以降、肥君氏と肥直氏が肥国の主導的地位をめぐり競合関係にあったことはいえるのではないだろうか。

また、六世紀代は葦北国造の刑部鞍部阿利斯登が対外政策に関与し、子の日羅は百済国の高官となり王権から国政について問われるなど、肥国造の南方に位置する葦北国造の重要性が高まっていく時期である（『紀』敏達十二年（五八三）是歳条）。そして、肥後北部では王権から那津官家修造事業の中心的立場を公認された阿蘇君氏が勢力を伸長させつつあった。六世紀代の肥後では、肥君氏が肥直



氏との拮抗に晒され、肥君氏の本拠地の南北では葦北国造・阿蘇国造が台頭していたと評価できる。このような肥後の情勢下では、肥君氏も勢力保持のために他地域に進出し、また対外政策にも関与して王権の歛心を獲得する他なかったであろう。

しかしながら、ここで阿蘇君氏が肥君氏・肥直氏と同族という深い関係を有していたことに着目したい。肥君氏と肥直氏は競合する関係にあり、さらに葦北国造・阿蘇国造も注意すべき存在となっていた。そのような不安定な事情を抱え、阿蘇国造の勢力圏に接する肥君氏に対し、阿蘇君氏は同族関係の形成を求めたのではないだろうか。困難な立場にあった肥君氏が、那津官家修造に大きな役割を果たし、大規模な馬牧を経営している阿蘇君氏と緊密な関係を成立させることは、不都合な事態ではなかったであろう。また、阿蘇君氏としても、水上交通に長け、筑前などに勢力を拡大していた肥君氏との密接な関係は、ルートや収納作物の確保など、那津官家運営体制を強化するためにも必要であったと推察される。加えて、筑紫肥君氏の存在に象徴されるように、肥君氏は筑紫君氏と緊密な関係にあったことが知られているが、肥君氏と同族関係を形成させることで、那津官家運営体制に筑紫君氏を巻き込むことも不可能ではなかった。そして、勢力基盤は明らかではないものの、肥国の重要な地位にあった肥直氏とも同様の理由により同族関係を成立させたと思われる（二〇）。

本章では、阿蘇君氏と肥後北部の有力氏族や肥君氏・肥直氏との関わりについて述べた。那津官家修造・運営の重要な役割を果たしていた阿蘇君氏は、困難な局面を迎えていた肥後北部の有力氏族や肥君氏・肥直氏の間隙を突く形で、密接な関係を形成させていった

と指摘した。前者については阿蘇国造の阿蘇国に組み込み、後者とは同族関係を結ぶことで那津官家修造・運営を展開させたと考えられる。しかし、阿蘇君氏とこれら肥後の有力氏族は利害が一致しており、その関係は相互に依存し合うものであったと指摘でき、協調して那津官家の経営など王権の対外政策に関与していったといえよう。以上のように、鞠智城が築城される菊池郡域は、阿蘇君氏の影響を受けつつ七世紀後半を迎える。

### 三．七世紀後半の阿蘇君氏

#### （一）評の成立

本章からは、前章までの検討を踏まえ、鞠智城の形成期にあたる七世紀後半における阿蘇君氏を考え、同城との関係について述べる。七世紀後半になると国造の国に代わり評が成立し、それらが大宝元年（七〇一）の「大宝令」施行によって郡になっていくことが多くの先学によって指摘されている。しかし、現状の史料から肥後における評の形成プロセスを明らかにすることは困難である。そのため、本節では評の成立について比較的史料が豊富な東国の常陸などの在り方を検討し、肥後の評制を考察する一助とする。

『常陸国風土記』では、常陸の鹿嶋評・行方評・信太評や陸奥の石城評の成立を次のように説明している（史料中の「郡」は「大宝令」に基づく文飾）。

【史料9】『常陸国風土記』鹿嶋郡条

古老曰、難波長柄豊前大朝駟宇天皇之世、己酉年、大乙上中臣「子・大乙下中臣部兔子等、請惣領高向大夫」、割下総国海

上国造部内輕野以南一里・那賀国造部内寒田以北五里<sup>一</sup>、別置<sup>二</sup>神郡<sup>一</sup>。

【史料10】『常陸国風土記』行方郡条

古老曰、難波長柄豊前大宮馭宇天皇之世、癸丑年、茨城国造小乙下壬生連磨、那賀国造大建壬生直夫子等、請<sup>一</sup>惣領高向大夫・中臣幡織田大夫等<sup>一</sup>、割<sup>二</sup>茨城地八里<sup>一</sup>・那賀地七里<sup>一</sup>、合七百余戸<sup>一</sup>、別置<sup>二</sup>郡家<sup>一</sup>。

【史料11】『釈日本紀』卷十所引「常陸国風土記逸文」

古老曰、御<sup>一</sup>宇難波長柄豊前宮<sup>一</sup>之天皇御世、癸丑年、小山上物部河内・大乙上物部会津等、請<sup>一</sup>惣領高向大夫等<sup>一</sup>、分<sup>二</sup>筑波・茨城郡七百戸<sup>一</sup>、置<sup>二</sup>信太郡<sup>一</sup>。

【史料12】『常陸国風土記』多珂郡条

古老曰（中略）其後、至<sup>一</sup>難波長柄豊前大宮臨軒天皇之世<sup>一</sup>、癸丑年、多珂国造石城直美夜部、石城評造部志許赤等、請<sup>一</sup>申惣領高向大夫<sup>一</sup>、以<sup>一</sup>所部遠隔、往来不便<sup>一</sup>、分置<sup>二</sup>多珂・石城二郡<sup>一</sup>。

【史料9・12】によると、己酉年（大化五年〔六四九〕）に常陸の那賀国造・下総の海上国造の支配エリアを割く形で鹿嶋評が形成され、癸丑年（白雉四年〔六五三〕）に常陸の茨城評・那賀評の一部を割いて行方評が<sup>（二）</sup>、常陸の筑波評・茨城評を割いて信太評が、多珂評の一部分から石城評が成立したとされる。鎌田元一氏はこれら一群の史料から、『常陸国風土記』は旧来の国造のエリアを割い

て新たに分出した評についてのみ成立事情を記載したこと、建評申請者の二名が各評の評造となったこと、大化五年に全面的な建評が実施され、それらの評が再編されて大宝令制下の郡に引き継がれたことなどを指摘している（鎌田二〇〇一b）。鎌田氏の研究は評の成り立ちを考える上で重要であるが、常陸と同じく複数の国造国の集合体となる肥後における評制を考察するためにも欠かせない学説である。

なお、常陸・肥後とは異なり、国造の支配エリアが後の令制国一国に相当する例として、因幡の因幡国造や上野の上毛野国造が挙げられる。因幡では伊福部臣氏の系譜となる『伊福部臣古志』の検討により、因幡国造の国が水依評となり、同評が廃止されて高草評など多くの評が成立していったとされる（森二〇〇〇a）。上野においては、上毛野国造のエリアが某評となり、そこから八世紀までに十三の評が建評されたと指摘されている（川原二〇〇九）。このように、国造の支配エリアが令制国一国に相当するか否かを問わず、国造のエリアを分割・併合する形で評が成立していったと捉えられる。

ただし、評制の成立により国造の重要性が失われたとはいえない。国造国を廃して評が設置されていくわけであるが、百年近く存続した前代の枠組みを直ちに払拭することはできず、評制下においても国造は評造などにも影響力を及ぼす存在となっていた。【史料10・12】にみえるように評制下でも国造は確認され、国造軍の掌握に象徴されるように、評というエリアを越えて軍事的権限などを有し、時には国宰にも影響を与えており、地域にて大きな役割を果たしていたのである（森二〇〇〇b、鎌田二〇〇一b）。例えば、天

武十二年（六八三）の諸国へ向けた天武天皇の詔には「諸国司・国造・郡司及百姓等」とあり（『紀』天武十二年正月丙午条）、国司（国宰）―国造―郡司（評造）というランク付けがなされるが、これは国造が国宰のもとで評造の上に立つ地方官であったことを示している（篠川一九九六）。鞠智城が造営された七世紀後半は評制の時代にあたるが、評の官人である評造だけではなく、その上に序列付けされる国造との関連が注目されるであろう。

## （二）阿蘇君氏と鞠智城

本節では、前節までの検討を受けて七世紀後半における肥後北部の様相を論じる。本稿においては、六世紀代に阿蘇国造の阿蘇君氏は肥後北部を阿蘇国に組み込んだと捉えた。阿蘇君氏は、那津官家修造事業における中心的立場を認定され、さらに同氏は軍事的に必要な馬の大規模飼育により対外政策や穀運送にも貢献していたが、これらのファクターによって肥後北部への勢力拡大が可能となったといえる。そして、肥後北部の有力氏族や肥君氏なども連携して、那津官家の経営・機能維持に大きな役割を果たしたと評価できる。こうした状況は七世紀に入っても継続していったと推察される。

七世紀後半の孝徳大王代になると、肥後においても評制が敷かれることとなるが、常陸などの動向を参照すると、肥後北部では阿蘇国造の阿蘇国・阿蘇評から、後の郡へ継承される山鹿評・菊池評・合志評などが分出されていたと考えられる。これらの評の成立年代は不明であるが、八世紀初頭までにこれらの評が形成され、「大宝令」施行によって郡に移行したことは確かであろう。評制下に入っても、阿蘇君氏は前代と変わらず阿蘇国造を務めていたと思われる

（三）。肥後北部では、六世紀以来勢力を高めた阿蘇君氏の影響力が残り、評制初期段階では阿蘇国造が評のエリアを越えて主導的地位にあったと推測できよう。

しかし、白村江敗戦はこうした阿蘇君氏に大きな影響を与えることとなる。白村江敗戦に大きな衝撃を受けた王権は、古代山城などの防衛施設構築を進めるが、阿蘇国造という九州の有力氏族であり、那津官家の修造・運営にも重大な役割を果たし、さらに多くの有力氏族とも密接な関係を有する阿蘇君氏に対し、何らかの形で新たな局面を迎えた対外政策への関与を期待・要請していたと思われる。王権の要望に応えるために、阿蘇君氏は如何なる対応をしたのであろうか。

本論では、阿蘇君氏が鞠智城の築城に関与することで、王権の要望に応えたと考える。

六世紀以来、阿蘇君氏は王権の対外政策において九州最大の兵站機能を持つ那津官家の修造・運営に関わってきた。馬の飼育はさることながら、それ以上に那津官家修造・運営における特異な立場こそが阿蘇君氏の地位の上昇・維持に作用していたと評価でき、同氏も自氏の勢力拡大の礎となったこの実績を強く意識していたであろう。そして、肥後北部の有力氏族や肥君氏などと連携しつつ那津官家の運営に携わってきたのである。すなわち、阿蘇君氏は自氏を王権の対外政策を兵站施設構築およびその機能維持によって支援してきた存在という自負があったといえ、それを実行するための大規模な氏族ネットワークや、穀など軍事物資の運送を円滑にする多くの馬も保持していた。菊鹿盆地は高い農業生産力を誇るが、七世紀前半まで生産された作物の一部は阿蘇君氏や同氏に協調する肥後北部

の有力氏族によって那津官家に運ばれたと思われる。このような経緯を有する阿蘇君氏は、王権の対外政策に応じる際、百年近く自氏を底上げた那津官家修造・運営の業績を強く意識し、さらにそれらの遂行に大きく寄与した氏族ネットワークを変わらず活用することを意図していただろう。

先述のように、那津官家の建物群は大宰府・大野城の形成によって衰退し、それに伴い阿蘇君氏の同官家への関与も停止したのである。大宰府およびその前身施設や、大野城の造営に阿蘇君氏が関与したか否かは不詳である。ただし、全く関わっていなかったと捉えることは難しいと思われる。比恵・那珂遺跡群の建物群に納められた物資は、大野城の建物に収納された可能性が想定されているが（米倉一九九三）、阿蘇君氏が大宰府およびその前身施設や、大野城に対して物資を運送し、対外政策を支援していた可能性は捨て去るべきではない。

しかしながら、そのように考えたとしても、唐・新羅連合軍の国内侵攻が現実味を帯びるという、かつてない危機に晒されていた以上、さらなる軍事施設の拡張が不可欠となっていたと想定され、最前線となる筑紫方面を支援する兵站施設の増設も必要だったと思われる。王権から阿蘇君氏は筑紫方面への物資の輸送と共に、那津官家のような大規模な兵站基地の造営も求められていたのではないだろうか。那津官家修造・運営の業績を強く意識し、それらを展開せしめた氏族ネットワークを備える阿蘇君氏としても、大規模な兵站施設の構築は不都合なものではなく、阿蘇国造という肥後北部における自氏の特異な立場を保持するためにも積極的に応じたと捉えられる。そして、兵站施設を造営する位置については、交通の要衝か

つ機能を維持しやすい農業生産力の高い地域であることはさることながら、最前線となる筑紫から一定程度離れ、阿蘇君氏の意向が最も浸透しやすい地域、すなわち阿蘇国造の阿蘇国に相当する地域ということも条件となったであろう。

こうした阿蘇君氏の対応を受けた王権は、技術者集団を送り込み、阿蘇国域にあたり、また生産力も高い菊鹿盆地に位置し、かつ兵站施設を造りやすい平坦面を持つ米原台地を選定したのではないだろうか<sup>(三)</sup>。菊鹿盆地は阿蘇君氏が那津官家経営のために、勢力圏の中でも特に影響力の確保を志向した重要地域であり、同氏が阿蘇国に包括すべき地域であった。鞠智城は、他の古代山城と異なり広大な平坦面を有することが特色であり、軍事物資の集積に適していると理解されている（西住・矢野・木村編二〇一二、五十嵐二〇一五）。これについては「はじめに」において紹介した、鞠智城が生産力の高い菊鹿盆地の作物を納めるために造営され、当盆地を見下ろす米原台地という、付与された機能に相応しい位置に築城されたと考える木村氏の見解も参照できる。つまり、鞠智城は当初より対外政策に要する物資の集積という兵站機能が念頭に置かれており、その機能に適した占地がなされたといえるのであるが、ここに阿蘇君氏や王権の意向が反映されているのではないだろうか。鞠智城は亡命百済人の参与など、王権の主導のもと造営が進められたことが知られているが、その後の阿蘇君氏は阿蘇国造の影響力を駆使して、肥後北部から資材や労働力、倉に集積する物資を確保するなど、築城・運営に協力していったと捉えたい。前代以来の関係から、肥国造の肥君氏が協力したことも推測できる。なお、八世紀前半頃までの鞠智城は、大宰府およびその前身施設と連動して展開

しており、大宰府防衛の一翼を担っていることを考慮すると（矢野二〇一六）、阿蘇君氏が大宰府方面に物資を輸送していた可能性も指摘できよう。

私見のように捉えると、このような阿蘇君氏に肥後北部の有力氏族が同調したか否かが問題となろう。例えば、前掲の【史料10】の茨城国造壬生連磨の冠位は「小乙下」（令制の従八位下）であり、【史料11】にみえる信太評建評を申請した物部（姓なし）河内の冠位は「小山上」（令制の正七位上）である。信太評は茨城評から分かれた評であり、茨城国造の勢力圏にあたるが、同国造の冠位より信太評の評造の方が高い冠位を帯びている。物部（姓なし）氏は、姓を有していないことからもかつて部民であった下級氏族と思われるが、国造級の有力氏族を凌ぐ冠位を持つていることから、急激に勢力を伸ばしたことが窺える。こうした様相をみせる常陸では、果たして国造の影響力が確固たるものであったかは疑問である。評制施行については、物部（姓なし）氏など国造を脅かすような新興氏族を評造に任命することで、王権の地域支配を安定させる目的があったとされる（森二〇〇〇a）。常陸では、新興氏族が独自の動向をみせ、国造の影響下から離脱する事態も発生していたと想定できる。肥後の阿蘇君氏は、支配下の有力氏族とフラットな関係にあったと評価したが、王権の対外政策に独自に関与して地位を高め、阿蘇国造の影響下から離れることを画策する有力氏族の存在が推測できるかもしれない。

しかしながら、阿蘇国造の影響下の肥後北部では常陸のような事態は起こり難かったと考える。阿蘇君氏は長年に亘り王権の対外政策を様々な面から支援しており、王権が最も信頼する九州の有力氏

族の一つであったといつてよい。同氏は肥後北部の有力氏族や、広範囲に影響力を有する肥君氏とも関わりが深く、かかる氏族ネットワークを駆使して対外政策に重要な役割を果たしてきた。このような阿蘇君氏だからこそ、王権も白村江敗戦後の対外政策においても大きな期待を寄せていたと考えられる。こうした阿蘇君氏・王権が推進する事業に対し、肥後北部の有力氏族が独自の行動をとって勢力を高め、阿蘇国造の影響下から離れることは難しかったと思われる。唐・新羅連合軍による国内侵攻の危機に晒されていた王権としても、九州において最も依存すべき勢力の一つ、阿蘇国造の地域支配構造が混乱することは歓迎せざるものであった。むしろ肥後北部の有力氏族は、阿蘇君氏・王権の事業に協力することで王権から評造に任命されるなど、在地支配力を維持していったと捉えられよう。阿蘇君氏も王権の対外政策に貢献することによって、国造の地位を保持していったといえる。

以上のように、阿蘇君氏およびその影響下にあった有力氏族の支援の上に成立したのが鞠智城であったと考えられる。そして、兵站機能も有する鞠智城の設計・選地については、王権の対外政策における兵站の構築・維持に長けていたという阿蘇君氏の民族的特性や、菊鹿盆地が阿蘇国域に位置し、阿蘇国造の勢力圏の中でも影響力の発揮が容易であったことも関係していると捉えられよう。最前線が朝鮮半島から筑紫に移動する可能性があった七世紀後半において、主たる兵站基地も那津官家からより内陸に移す必要があったと想定されるが、その兵站施設の造営には同官家の修造・運営に関わり、兵站構築・維持のノウハウを有する阿蘇君氏が期待されていたと思われる。

おわりに

本稿では、六・七世紀の肥後における有力氏族、特に阿蘇君氏の動向を追い、鞠智城との関係を考察した。その結果、次の結論に至った。

i. 六世紀以降、阿蘇国造の阿蘇君氏は那津官家修造・運営や大規模な馬の飼育など、王権の対外政策に大きく貢献した。九州における地位を高めた同氏は、それを背景として肥後北部へ影響力を扶植していったと評価できる

ii. 阿蘇君氏は肥後北部の有力氏族や肥君氏と協調しつつ、那津官家の兵站機能を維持していたと捉えられる

iii. 白村江敗戦後に鞠智城が築城されるが、同城が兵站機能を有しているのは、阿蘇君氏が対外政策における兵站の構築・保持に長じていたことが関係し、王権が同氏に那津官家のような兵站施設の造営を要請したことに求められる。また、鞠智城が米原台地に築かれた要因としては、同地が交通の要衝であると共に生産力の高い菊池郡域にあり、兵站施設を構築しやすい平坦面を持っていたことの他、阿蘇君氏の勢力圏、その中でも同氏が特に影響力を発揮しやすい阿蘇国域であったことも関係する。そして、阿蘇君氏は那津官家に代わって鞠智城の整備に協力することで、前代より続く阿蘇国造の地位の確保を志向し、勢力の維持に努めたといえる

本論においては、阿蘇国造である阿蘇君氏が肥後北部に影響力を有しており、それによって鞠智城の築城を推進したと述べ、初期の同城が「官営」と「私営」の性格を併せ持つことを指摘した。しかし、天武末年頃になり六世紀以来の性格を有する阿蘇国造が任命されな

くなると、次第に肥後北部における阿蘇君氏の影響力は弱まり、鞠智城と同氏の関係も希薄化していった可能性が想起される。八世紀以降、鞠智城の兵站機能は多様化しながら維持されていく（五十嵐二〇一六）。こうした八世紀以降の鞠智城に、阿蘇君氏など肥後の有力氏族がどのように関与していったのか、現状の史料から考察するのは困難であるが、今後検討を重ねるべき問題と思われる。

中世の阿蘇（宇治）氏と菊池氏は、密接な関係にあったことが知られているが、両者のつながりのように、古代においても阿蘇郡域と菊池郡域の関わりは深かったと評価できる<sup>（二四）</sup>。鞠智城を研究するにあたっては、阿蘇郡域の動向にも注目する必要があるだろう。鞠智城からは菊鹿盆地を臨むことができるが、それに加えて阿蘇外輪山も眺望できることは重要視されても良いのではないだろうか。

#### 注

（一）本稿では、火君氏・火国造など氏族・国造の表記について、「肥君氏・肥国造」というように令制国に即したものとする。また、「君」の姓は「公」とも記されるが「君」に統一する。

（二）史料の性格上慎重に検討を要するが、「阿蘇家略系譜」（阿蘇家所蔵）によると、阿蘇君氏の一族と想定される宇治部君氏は七世紀後半の阿蘇評造や、八世紀以降の阿蘇郡領・阿蘇神社神主などの有力者を輩出していることが記されている。宇治部君氏の系統は中世以降の阿蘇氏につながっているとされる（田中卓一九八六）。

（三）「阿蘇家略系譜」にみえる「阿蘇」の氏名を名乗っていない宇治部君氏は評造や郡領を出す有力な系統であるが、阿蘇国造となっていないことは注目できる。

(四) 一般的にこれらの屯倉は、筑紫の穂波屯倉・鎌屯倉、豊の湊崎屯倉・桑原屯倉・肝等屯倉・大抜屯倉・我鹿屯倉、肥の春日部屯倉(『紀』安閑二年〔五三五〕五月甲寅条)という、現福岡県・大分県・熊本県域に設置された一連の屯倉を指すとされる。また、筑紫君磐井の乱の贖罪として、子の筑紫君葛子が献じた糟屋屯倉も候補となり、大形建物群が発見された鹿部田測遺跡(現福岡県古賀市)に比定されている。

(五) 『統紀』延暦四年(七八五)正月癸亥条では、海部郡大領の海部君常山が善政により外従五位下を賜与されたことが記され、当郡の有力氏族であったことが分かる。

(六) 「阿蘇家略系譜」では宇治部君氏の傍系として「直」姓を有する阿蘇直氏が見え、「建句々知君」を祖とする。田中卓氏は、「句々知」は「菊池」郡域と何らかの関係があるのではないかと指摘している(田中卓一九八六)。系譜において、阿蘇直氏は顕著な事績をみせないが、新たに阿蘇国に含まれた菊鹿盆地を確保するために阿蘇君氏が送り込んだ氏族ではないだろうか。ないし現地の氏族を同族関係に組み入れたことも推測できる。

(七) 木村龍生氏の御教示による。

(八) 筑前国嶋郡大領として肥君猪手(『大宝二年〔七〇二〕筑前国戸籍』『大日本古文書』一)、肥前国松浦郡に肥君某(『日本霊異記』下第三五)、薩摩国出水郡大領として肥君某がみえる(『天平八年〔七三六〕薩摩国正税帳』『大日本古文書』二)。また、筑前国養父郡には筑紫君氏と肥君氏の婚姻によって成立したとされる筑紫肥君氏がいる(『続日本後紀』嘉祥元年〔八四八〕八月壬辰条)(井上一九七〇、瓜生二〇〇九)。

(九) 鈴木正信氏の御教示による。なお、鈴木氏も肥直氏が肥国造であった可能性を考えているとのことである。

(一〇) かつて肥直氏が肥君氏と密接な関係にあり、すでに同族関係が成立し

ていた可能性も想定し得る。その場合は阿蘇君氏と肥直氏の関連性は希薄であったとも評価できる。そして、肥直氏は阿蘇君氏と緊密な関係を形成させた肥君氏に徐々に圧迫されるようになり、中央に活路を求めたとも推測可能であろう。

(一一) 篠川賢氏は行方評建評の時にはいまだ茨城評・那賀評は形成されておらず、茨城国造・那賀国造のエリアの一部を割いて行方評が成立し、この際に茨城評・那賀評へ移行したと指摘している。また、多珂国造のエリアを分断するように多珂評・石城評が成立したとされる(篠川一九九六)。

(一二) 「阿蘇家略系譜」によると、阿蘇君氏の一族である宇治部君氏が阿蘇評督となっているが、阿蘇国造とはなっていない。これは本宗たる阿蘇君氏が阿蘇国造であったためであろう。

(一三) 鞠智城築城前の米原台地には集落が形成されており、菊鹿盆地を見下ろす位置にあることから同盆地を管理した有力者が居住していた可能性があるという(木村二〇一一)。恐らく、「建句々知君」を祖とする阿蘇直氏、もしくは阿蘇君氏に協調する有力氏族が関係してくると思われるが、こうした政治的拠点があったことも米原台地に兵站施設が築かれるようになった一因ではないだろうか。

(一四) 木崎康弘氏の御教示による。

#### 参考文献

- 飯田武郷 一九三〇 『日本書紀通釋』四 内外書籍  
五十嵐基善 二〇一五 『西海道の軍事環境からみた鞠智城の機能』『鞠智城と古代社会』三 熊本県教育委員会  
五十嵐基善 二〇一六 『西海道における武器の生産・運用体制と鞠智城』『鞠智城と古代社会』四 熊本県教育委員会

- 石母田正 一九七一 『日本の古代国家』 岩波書店
- 板橋和子 二〇〇三 「大和政権と宇土地域」『新宇土市史』 通史編一 自然・原始古代 宇土市
- 井上辰雄 一九七〇 『火の国』 学生社
- 瓜生秀文 二〇〇九 「筑紫君磐井の乱後の北部九州」 長洋一監修・柴田博子編 『日本古代の思想と筑紫』 権歌書房
- 鎌田元一 二〇〇一 a 「屯倉制の展開」『律令公民制の研究』 塙書房 初出 一九九三
- 鎌田元一 二〇〇一 b 「評の成立と国造」『律令公民制の研究』 塙書房 初出 一九七七
- 川原秀夫 二〇〇九 「上野における郡家地域の景観と郡司」『國史學』 一九八
- 木崎康弘 二〇一四 「鞠智城選地論」 覚書『鞠智城跡Ⅱ—論考編二—』 熊本県教育委員会
- 木村龍生 二〇一一 「鞠智城跡の古墳時代後期後半の集落について」『熊本古墳研究』 四
- 木村龍生 二〇一四 「鞠智城の役割に関する一考察」『鞠智城跡Ⅱ—論考編一—』 熊本県教育委員会
- 隈昭志 一九九九 『長目塚と阿蘇国造』（阿蘇選書一） 一の宮町
- 隈昭志 二〇〇四 「大和朝廷と阿蘇国造」『長陽村史』 長陽村
- 佐伯有清 一九八二 『新撰姓氏録の研究』 考證篇二 吉川弘文館
- 佐伯有清 一九八三 『新撰姓氏録の研究』 考證篇六 吉川弘文館
- 酒井芳司 二〇〇八 「那津官家修造記事の再検討」『日本歴史』 七二五
- 坂本経堯 一九七九 a 「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就て」 坂本経堯先生著作集刊行会編『肥後上代文化の研究』 肥後上代文化研究所・肥後考古学会 初出一九三七

- 坂本経堯 一九七九 b 「墓誌銅板を副葬した玉名郡人日置氏墳墓考」 坂本経堯先生著作集刊行会編『肥後上代文化の研究』 肥後上代文化研究所・肥後考古学会
- 篠川賢 一九九六 『日本古代国造制の研究』 吉川弘文館
- 篠川賢 二〇〇五 「国造の「氏姓」と東国の国造制」あたらしい古代史の会編『王権と信仰の古代史』 吉川弘文館
- 須原祥二 二〇一一 「仕奉」と姓『古代地方制度形成過程の研究』 吉川弘文館 初出二〇〇三
- 高木恭二 二〇一二 「菊池川流域の古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』 一七三
- 田中卓 一九八六 「古代阿蘇氏の一考察」『田中卓著作集』 二 国書刊行会 初出一九六〇
- 田中史生 二〇一四 「ミヤケの経営と渡来人」『六世紀の九州島 ミヤケと渡来人』(掘ったバイ筑豊二〇一二 古代史シンポジウム記録集) 嘉麻市教育委員会
- 鶴嶋俊彦 一九七九 「古代肥後国の交通路についての考察」『駒沢大学大学院地理学研究』 九
- 鶴嶋俊彦 一九九七 「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』 七
- 鶴嶋俊彦 二〇一一 「古代官道車路と鞠智城」 鈴木靖民編『古代東アジアの道路と交通』 勉誠出版
- 長洋一 一九九一 「鞠智城について」『都府楼』 一二二
- 中村友一 二〇〇九 『日本古代の氏姓制』 八木書店
- 中村友一 二〇一五 「地方豪族の姓と仕奉形態」 加藤謙吉編『日本古代の王権と地方』 大和書房
- 西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 二〇一二 『鞠智城跡Ⅱ—鞠智城跡第八—』



三十二次調査報告『熊本県教育委員会』

仁藤敦史 二〇一二 「古代王権と「後期ミヤケ」」『古代王権と支配構造』吉川

弘文館 初出二〇〇九

前沢和之 一九九一 「上野国の馬と牧」『群馬県史』通史編二、群馬県

松原弘宣 一九八三 「難波津と瀬戸内支配」『ヒストリア』一〇〇

宮川麻紀 二〇一三 「鞠智城築城の背景」『鞠智城と古代社会』一 熊本県教

育委員会

桃崎祐輔 二〇一四 a 「ミヤケと北部九州の遺跡」『六世紀の九州島 ミヤケ

と渡来人』（掘ったバイ筑豊二〇一二 古代史シンポジウム記録集）嘉麻

市教育委員会

桃崎祐輔 二〇一四 b 「遠賀川流域のミヤケと渡来人について（討論）」『六世

紀の九州島 ミヤケと渡来人』（掘ったバイ筑豊二〇一二 古代史シンポジ

ウム記録集）嘉麻市教育委員会 桃崎氏の発言箇所による

森公章 二〇〇〇 a 「評の成立と評造」『古代郡司制度の研究』吉川弘文館 初

出一九八七

森公章 二〇〇〇 b 「評制下の国造に関する一考察」『古代郡司制度の研究』

吉川弘文館 初出一九八六

矢野裕介 二〇一六 「鞠智城跡とその変遷」須田勉編『日本古代考古学論集』

同成社

吉田孝 一九八八 「古代社会における「ウヂ」」『日本の社会史』六 岩波書店

米倉秀紀 一九九三 「那津官家？」『福岡市立博物館研究紀要』三